単位円板上の高精度関数近似

M2004MM038 佐藤 公治

指導教員 杉浦 洋

1 はじめに

本論文では単位円板上の高精度関数近似について 研究する.単位円板上の2変数解析関数をF(x,y)と する.極座標変換 $x = r\cos t$, $y = r\sin t$ により, $f(r,t) = F(r\cos t, r\sin t)$ となる.このf(r,t)を偏角 t方向はFourier 展開,動径r方向は直交多項式展開す る.我々は偏角に関するFourier 展開の係数k次 cosine 係数 $\hat{a}_k(r)$,k次 sine 係数 $\hat{b}_k(r)$ の性質を調べ, $\hat{a}_k(r)/r^k$, $\hat{b}_k(r)/r^k$ が解析的偶関数であることに着目した.従来の 関数近似モデルではこのような性質が反映されていない.

その点をふまえ,本論文では新たな関数近似モデル を提案する.区間 [0,1] における, r^k と解析的偶関数 との積で表される関数全体からなる,関数族を A_k と し,関数族 A_k に直交基底 $\{\psi_j^{[k]}(r)\}_{j\geq 0}$ を導入する. これによりf(r,t)は直交基底 $\{\psi_j^{[k]}(r)\cos kt\}_{j\geq 0,k\geq 0} \cup$ $\{\psi_j^{[k]}(r)\sin kt\}_{j\geq 0,k\geq 1}$ によりFourier 展開される.我々 はf(r,t)の近似モデルとして,この基底による有限 Fourier 級数を採用する.

数値実験では,特異性を持たない関数と特異性を持つ関数について,各モデルの近似性能を比較することにした.

2 偏角に関する Fourier 展開の係数 ĉ_k(r) の性 質とその近似モデルの性質

2.1 偏角に関する Fourier 展開の係数 $\hat{c}_k(r)$ の性質

単位円板上の2変数解析関数 F(x,y) を考える.F(x,y)は単位閉円板 $D = \{(x,y)|x^2 + y^2 \le 1\}$ において, x, y それぞれについて解析的であるとする.このとき F(x,y)のテーラー展開は,展開の中心の近傍で絶対収束する.特 に原点を中心としたテーラー展開

$$F(x,y) = \sum_{k=0}^{\infty} \sum_{l=0}^{\infty} \hat{f}_{kl} x^k y^l , \hat{f}_{kl} = \frac{F^{(k,l)}(0,0)}{k! \, l!} \quad (1)$$

は , ある d > 0 に関して |x| < d , |y| < d で絶対収束する .

極座標変換した関数 f(r,t) の偏角に関する Fourier 展開を

$$f(r,t) = F(r\cos t, r\sin t) = \sum_{k=-\infty}^{\infty} \hat{c}_k(r) e^{ikt}$$
$$= \frac{1}{2}\hat{a}_0(r) + \sum_{k=1}^{\infty} \{\hat{a}_k(r)\cos kt + \hat{b}_k(r)\sin kt\}(2)$$

と書く.その展開係数

$$\hat{c}_k(r) = \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} f(r,t) e^{-ikt} dt = \frac{1}{2} (\hat{a}_k(r) - i\hat{b}_k(r))(3)$$

を複素 Fourier 係数という. また,

$$\hat{a}_{k}(r) = \frac{1}{\pi} \int_{0}^{2\pi} f(r,t) \cos kt \, dt,$$
$$\hat{b}_{k}(r) = \frac{1}{\pi} \int_{0}^{2\pi} f(r,t) \sin kt \, dt \tag{4}$$

を実 Fourier 係数という.

ここで, $k \ge 0$ に対して,閉区間[0,1]上の解析関数からなる関数族

$$A_k = \{r^k ilde{g}(r): ilde{g}(r)$$
は $[-1,1]$ 上の解析的偶関数 $\}$

を定義する.

[定理] 式 (3) の複素 Fourier 係数 $\hat{c}_k(r)$ は次の性質を 持つ.

$$\hat{c}_k(r) \in A_{|k|} \quad (-\infty < k < \infty).$$

すなわち,

$$\hat{c}_k(r) = \sum_{m=0}^{\infty} \hat{c}_{k,|k|+2m} r^{|k|+2m}$$
(5)

とマクローリン展開できる.

この定理と $\hat{a}_k(r) = 2 \text{Re} \hat{c}_k(r)$, $\hat{b}_k(r) = -2 \text{Im} \hat{c}_k(r)$ よ り直ちに次の系を得る.

[系] 式 (4) の実 Fourier 係数は次の性質を持つ.

$$\hat{a}_k(r) \in A_k(0 \le k < \infty)$$
 , $\hat{b}_k(r) \in A_k(1 \le k < \infty)(6)$

証明は次の補題による.

[補題] $j \ge 0, \, 0 \le k \le j$, $-\infty < l < \infty$ について

$$I_{j,k,l} = \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \cos^k t \, \sin^{j-k} t \, e^{-ilt} \, dt \qquad (7)$$

|l| > jまたはj - lが奇数ならば $I_{j,k,l} = 0$.

2.2 *ĉ_k(r)*の直交多項式展開
 単位円板上の関数の内積

$$(f,g) = (F,G) = \int \int_{x^2 + y^2 \le 1} F(x,y) G(x,y) dx dy$$
$$= \int_0^1 \{ \int_0^{2\pi} f(r,t) g(r,t) dt \} r dr$$
(8)

に関連して,関数空間 A_k に重み r の内積

$$(f,g) \equiv \int_0^1 f(r)g(r)rdr \tag{9}$$

を導入する.この内積について, A_k の基底 $(k \ge 0)$

$$\psi_l^{[k]}(r) = r^k P_l^{(0,k)}(2r^2 - 1) \ (l \ge 0) \tag{10}$$

は直交基底である.ここで, $P_l^{(0,k)}$ は l 次 Jacobi 多項式である.したがって,基底 $(\psi_l^{[k]})_{l\geq 0}$ による f(r,t)の Fourier 係数 $\hat{c}_k(r)$ の展開を

$$\hat{c}_k(r) = \sum_{l=0}^{\infty} \hat{c}_{kl} \psi_l^{[k]}(r)$$
(11)

とすると,その係数は

$$\hat{c}_{kl} = (4l + 2k + 2)(\hat{c}_k, \psi_l^{[k]}) \ (l \ge 0)$$
 (12)

である.

2.3 数値積分による ĉ_{kl} の計算

数値解法において内積 $(\hat{c}_k, \psi_l^{[k]})$ は数値積分則で計算する. $\hat{c}_k(r) = r^k \hat{d}_k(r^2)$ とし,変数変換 $s = 2r^2 - 1$ で

$$\begin{aligned} (\hat{c}_k, \psi_l^{[k]}) &= \int_0^1 \hat{c}_k(r) \psi_l^{[k]}(r) r dr \\ &= \int_0^1 r^{2k} \hat{d}_k(r^2) P_l^{(0,k)} (2r^2 - 1) r dr \\ &= \frac{1}{4} \int_{-1}^1 (\frac{1+s}{2})^k \hat{d}_k(\frac{1+s}{2}) P_l^{(0,k)}(s) ds (13) \end{aligned}$$

最右辺に N 点数値積分則

$$I_N f = \sum_{j=1}^N w_j f(\xi_j) \cong \int_{-1}^1 f(x) dx$$

を用いて , $r_j = ((1+\xi_j)/2)^{1/2} (\xi_j = 2r_j^2 - 1)$ とすると ,

$$(\hat{c}_{k}, \psi_{l}^{[k]}) \cong G_{kl} = \frac{1}{4} \sum_{j=1}^{N} w_{j} (\frac{1+\xi_{j}}{2})^{k} \hat{d}_{k} (\frac{1+\xi_{j}}{2}) P_{l}^{(0,k)}(\xi_{j})$$
$$= \frac{1}{4} \sum_{j=1}^{N} w_{j} r_{j}^{2k} \hat{d}_{k}(r_{j}^{2}) P_{l}^{(0,k)}(2r_{j}^{2}-1)$$
$$= \frac{1}{4} \sum_{j=1}^{N} w_{j} \hat{c}_{k}(r_{j}) \psi_{l}^{[k]}(r_{j})$$
(14)

である.これにより,

$$\hat{c}_{kl} \cong (4l + 2k + 2)G_{kl} \ (l \ge 0)$$
 (15)

を得る.変数変換 $s = 2r^2 - 1$ により,積分則 I_N がd次ならば,被積分関数 $\hat{c}_k(r)\psi_l^{[k]}(r)$ が2d次多項式まで正確に積分できる.N点 Gauss 則の場合,4N - 2次,境界条件に配慮してN + 1点 Radau 則の場合,4N次多項式まで正確である.

3 関数近似モデル

被近似関数の式 (2) は無限級数で表されているが,有限 級数で近似することを考える.DFT(離散 Fourier 変換) すると,近似関数

$$f_n(r,t) = \sum_{k=0}^{n} {}''\{\tilde{a}_k(r)\cos kt + \tilde{b}_k(r)\sin kt\} \cong f(r,t)$$
(16)
を得る.ここで $\sum {}''$ は初項と末項を 1/2 倍にして和をと
ることを意味する.ちなみに $\tilde{a}_k(r)$, $\tilde{b}_k(r)$ は

$$\tilde{a}_{k}(r) = \frac{1}{n} \sum_{j=0}^{2n-1} f(r, t_{j}) \cos kt_{j},$$

$$\tilde{b}_{k}(r) = \frac{1}{n} \sum_{j=0}^{2n-1} f(r, t_{j}) \sin kt_{j},$$

$$t_{j} = \frac{\pi}{n} j \ (0 \le j \le 2n - 1)$$
(17)

である.式 (17)の $\tilde{a}_k(r)$, $\tilde{b}_k(r)$ を高々m次多項式 $a_k(r)$, $b_k(r)$ で近似して最終的に有限級数による近似式

$$f_{mn}(r,t) = \sum_{k=0}^{n} {}''\{a_k(r)\cos kt + b_k(r)\sin kt\}, \quad (18)$$
$$a_k(r) \cong \tilde{a}_k(r) \cong \hat{a}_k(r), \\ b_k(r) \cong \tilde{b}_k(r) \cong \hat{b}_k(r)$$

を得る.

3.1 従来の関数近似モデル

従来の関数近似モデル [1] においては,式 (17)の $\tilde{a}_k(r)$, $\tilde{b}_k(r)$ を m 次以下の Legendre 級数で近似し,

$$a_k(r) = \sum_{j=0}^m a_{kj} P_j(2r-1) \cong \tilde{a}_k(r) \cong \hat{a}_k(r),$$

$$b_k(r) = \sum_{j=0}^m b_{kj} P_j(2r-1) \cong \tilde{b}_k(r) \cong \hat{b}_k(r)$$
(19)

とする . $P_j(x)$ は j次 Legendre 多項式である . [アルゴリズム]

式 (17) の $\tilde{a}_k(r)$, $\tilde{b}_k(r)$ の Legendre 多項式による展開係数 \tilde{a}_{kj} , \tilde{b}_{kj} は,

$$\tilde{a}_{kj} = \frac{1}{h_j} \int_0^1 \tilde{a}_k(r) P_j(2r-1) dr,$$
$$\tilde{b}_{kj} = \frac{1}{h_j} \int_0^1 \tilde{b}_k(r) P_j(2r-1) dr$$

のように積分表示できる . $h_j = \int_0^1 P_j^2 (2r-1) dr = 1/(2j+1)$ である .

式 (19) の $a_k(r)$, $b_k(r)$ の展開係数 a_{kj} , b_{kj} は, それ を Gauss 積分則で近似して

$$a_{kj} = \frac{1}{h_j} \sum_{l=1}^{m+1} w_l \tilde{a}_k(r_l) P_j(2r_l - 1) \cong \tilde{a}_{kj},$$

$$b_{kj} = \frac{1}{h_j} \sum_{l=1}^{m+1} w_l \tilde{b}_k(r_l) P_j(2r_l - 1) \cong \tilde{b}_{kj}, \quad (20)$$

で計算する . *r*_l , *w*_l はそれぞれ区間 [0,1] 上の Gauss 積 分則の分点と重みである .

式 (20) の $\tilde{a}_k(r_l)$, $\tilde{b}_k(r_l)$ は, 変数 t の周期関数 $f(r_l, t)$ の離散型 Fourier 係数で,以下のように計算される.

$$\tilde{a}_{k}(r_{l}) = \frac{1}{n} \sum_{j=0}^{2n-1} f(r_{l}, t_{j}) \cos kt_{j},$$
$$\tilde{b}_{k}(r_{l}) = \frac{1}{n} \sum_{j=0}^{2n-1} f(r_{l}, t_{j}) \sin kt_{j},$$
$$t_{j} = \frac{\pi}{n} j \ (0 \le j \le 2n - 1).$$
(21)

3.2 我々の新たな関数近似モデル

今回,我々の考案した新たな関数近似モデルにおいては, $\hat{a}_k(r) \in A_k$, $\hat{b}_k(r) \in A_k$ を考慮して,直交多項式 (10)を基底とする有限級数によるm次多項式近似

$$a_k(r) = \sum_{j=0}^{\lfloor (m-k)/2 \rfloor} a_{kj} \psi_j^{[k]}(r) \cong \tilde{a}_k(r) \cong \hat{a}_k(r),$$

$$b_k(r) = \sum_{j=0}^{\lfloor (m-k)/2 \rfloor} b_{kj} \psi_j^{[k]}(r) \cong \tilde{b}_k(r) \cong \hat{b}_k(r) \quad (22)$$

を作る. $\lfloor x \rfloor$ は実数 x より小さい整数の最大値である. [アルゴリズム]

式 (17) の $\tilde{a}_k(r)$, $\tilde{b}_k(r)$ の直交基底 $\{\psi_j^{[k]}(r)\}_{j\geq 0}$ による 展開係数 \tilde{a}_{kj} , \tilde{b}_{kj} は,

$$\begin{split} \tilde{a}_{kj} &= \frac{1}{h_{kj}} \int_0^1 \tilde{a}_k(r) \psi_j^{[k]}(r) r dr, \\ \tilde{b}_{kj} &= \frac{1}{h_{kj}} \int_0^1 \tilde{b}_k(r) \psi_j^{[k]}(r) r dr \end{split}$$

のように積分表示できる . $h_{kj} = \int_0^1 (\psi_j^{[k]}(r))^2 r dr = 1/(4j+2k+2)$ である .

式 (22) の $a_k(r)$, $b_k(r)$ の展開係数 a_{kj} , b_{kj} は, 右辺の積分を 2.3 節の数値積分で近似して

$$a_{kj} = \frac{1}{4 h_{kj}} \sum_{l=1}^{N} w_l \tilde{a}_k(s_l) \psi_j^{[k]}(s_l) \cong \tilde{a}_{kj},$$

$$b_{kj} = \frac{1}{4 h_{kj}} \sum_{l=1}^{N} w_l \tilde{b}_k(s_l) \psi_j^{[k]}(s_l) \cong \tilde{b}_{kj} \qquad (23)$$

で計算する. w_l は区間 [0,1] の Gauss 積分則の重み, $s_l = \sqrt{r_l}$, r_l は Gauss 積分則の分点である.

標本点数 N は, $\tilde{a}_k(r)$, $\tilde{b}_k(r)$ が m 次多項式のとき に $a_{kj} = \tilde{a}_{kj}$, $b_{kj} = \tilde{b}_{kj}$ となるように定める . N 点 Gauss 則の場合, 被積分関数が 2N - 1 次までの多項式 のとき正確に積分できる.このことを考慮して考えると, $N = \lceil (m+1)/2 \rceil$ である. $\lceil x \rceil$ は実数 x より大きい整数 の最小値である. $\tilde{a}_k(s_l)$, $\tilde{b}_k(s_l)$ は, 変数 t の周期関数 $f(s_l, t)$ の離散型 Fourier 係数で,以下のように計算される.

$$\tilde{a}_{k}(s_{l}) = \frac{1}{n} \sum_{j=0}^{2n-1} f(s_{l}, t_{j}) \cos kt_{j},$$
$$\tilde{b}_{k}(s_{l}) = \frac{1}{n} \sum_{j=0}^{2n-1} f(s_{l}, t_{j}) \sin kt_{j},$$
$$t_{j} = \frac{\pi}{n} j \ (0 \le j \le 2n - 1).$$
(24)

4 数値実験

数式処理ソフトウェア Mathematica5 と C 言語双方で, 誤差評価の数値実験を行った.

様々な多項式の次数 $m \ge 0$ と Fourier 展開の次数 $n \le m$ について,式 (18)の近似関数 f_{mn} の最大絶対誤差

$$E_{mn} = \max_{\substack{1 \le i \le N \\ 0 \le j \le M - 1}} |f_{mn}(r_i, t_j) - f(r_i, t_j)| \quad (25)$$

を計算した.ここで

$$\begin{cases} r_i = \left(\cos\frac{\pi(i-\frac{1}{2})}{N} + 1\right)/2 & (1 \le i \le N) \\ t_j = \frac{2\pi j}{M} & (0 \le j \le M - 1) \end{cases}$$

であり, $\{r_i\}$ は区間 [0,1] の N 点 Chebyshev 点, $\{t_j\}$ は 区間 $[0,2\pi)$ の M 等分点である.具体的には M = 256, N = 128 とし, C 言語による実装での結果を示す. 4.1 実験 1

複素 2 次元空間 C^2 に特異点を持たない関数 $F(x,y) = e^x$ の近似を行う. 多項式の次数 m, Fourier 展開の次数 n で $m = n = 2^l (1 \le l \le 8)$ とした結果を図 1 に示す.



各モデルにおいて,最初,最大絶対誤差は次数 m,n に 対し,等比数列的に減少し,10⁻¹⁴程度になる.その後, ゆるやかに増大する.後者の増大の原因は計算量の増加 による丸め誤差の蓄積だと考えられる.

我々の方法と従来の方法での最大絶対誤差はほぼ等し い.展開項数は我々の方法では $\frac{1}{2}m^2 + O(m)$ であり,従 来法における $2m^2 + O(m)$ の約1/4である.近似法の効 率を展開項数で比べるなら,この問題においては,我々の 方法は従来の方法に比べ約4倍効率的である. 4.2 実験 2

複素 2 次元空間 C^2 に特異点を持たない関数 $F(x,y) = e^{x+y}$ の近似を行う.実験 1 と同様に $m = n = 2^l (1 \le l \le 8)$ とした結果は,実験 1 とほぼ同様であった.

4.3 実験3

複素 2 次元空間 C^2 に特異点を持つ関数 $F(x,y) = 1/((x+a)^2 + y^2 + b^2)$ の近似を行う. $m = n = 2^l (1 \le l \le 8)$ とし,パラメータ a = 1.5, b = 2.0としたときの結果は実験 1,2とほぼ同様の結果が得られた.

次にパラメータ a = 0, b = 0.3 としたとき, 我々の 方法は従来の方法と比べかなり精度が悪いことがわかっ た.これはパラメータを変えたことにより複素 2 次元空 間 C^2 における特異点の分布が変化したためであると考 えられる.

4.4 実験4

近似精度に対する特異点の影響を調べるために,実験3 の被近似関数 $F(x,y) = 1/((x+a)^2 + y^2 + b^2)$ における パラメータ (a,b) を系統的に変化させて最大絶対誤差を測 定した.最大絶対誤差はa,bの値が小さくなるほど大き くなる傾向があることがわかった.

まず, (m,n) = (32,32)と固定すると最大絶対誤差 E(a,b)はa, bの関数である.図2に $E(a,b) = 10^{-10}$ の 等高線を示す.

 $|a| \ge 1$ のときには我々の方法と従来法はほぼ等しい近 似精度を持つ.しかし,|a| < 1のとき,従来法のほうが 小さなbまで精度良く求まることがわかる.



図 3 展開項数がほぼ等しいときの $E(a,b) = 10^{-10}$ の等高線

次に 2 つの方法の展開項数をほぼ等しくとって,同 じ実験を試みた. (m,m)次の従来法は $2m^2 + 2m$ 項 で,(2m,2m)次の我々の方法は $2m^2 + 3m$ 項とほぼ 等しい.具体的には,(32,32)の従来法(項数 2112)と (64,64)の我々の方法(項数 2144)について比較実験を 行った.最大絶対誤差 E(a,b)はa,bの関数である.図 3 に $E(a,b) = 10^{-10}$ の等高線を示す.我々の方法の方 が $E(a,b) \ge 10^{-10}$ となる領域が小さい.総合的に見れば 我々の方法が従来の方法よりも優れていると言える.しかし, *a* が0 に近い狭い領域では,依然として従来法のほうが有利であった.

4.5 考察

実験3について,2変数関数近似において特異点集合と 近似領域の距離を求め,その最大絶対誤差との関係を調 べることにした.

実単位円板 $D = \{(x', u') \in \mathbf{R}^2 : x'^2 + u'^2 \leq 1\} \subset \mathbf{C}^2$, 特異点集合 $P = \{(z, w) : (z - a)^2 + w^2 + b^2 = 0\} \subset \mathbf{C}^2$ について次の定理が成立する. [定理]

$$d(P,D)^{2} = \begin{cases} b^{2} & , |a| \leq 1, \\ \frac{1}{2}(|a|-1)^{2} + b^{2} & , |a| > 1 \end{cases}$$

この定理により,実験4の結果を解釈する.図2において, $|a| \le 1$ のとき,我々の方法の最大絶対誤差はb = 0.8のときに,ほぼ 10^{-10} で一定となっている.よって,距離d(P,D) = 0.8のときに一定の最大絶対誤差となっている.最大絶対誤差は特異点集合Pと近似領域である実単位円板Dとの距離d(P,D)に支配されていると思われる.

|a|>1のとき, d(P,D)=r(-定値)の曲線は偏平率
 $\sqrt{2}$ の楕円 $d(P,D)^2=\frac{1}{2}(a-1)^2+b^2=r^2$ である.もし,
 完全にd(P,D)が誤差を支配するなら,E(a,b)の等高線はこの楕円になるはずである.図2より,それはむしろ円に近く,この仮説は実験結果と近いものの,それを完全に説明するものではない.

結論として,2変数関数近似の問題においても特異点集 合と近似領域の距離が最大絶対誤差に強く相関している ことがわかった.しかし,距離のみで最大絶対誤差を完全 に予測することはできない.特異点の配置が問題である と思われる.

5 おわりに

F(x,y)が複素 2次元空間 C^2 に特異点を持たない場合,我々の近似法は Shen のものと比べて約 1/4の展開項数で同等の精度を得ることができた.F(x,y)が特異点を持つ場合,総合的には我々の方法が従来の方法よりも優れているが,特異点が近似領域である実単位円板の中心に近いときのみ Shen の近似法が有利である傾向が見られた.

また,本研究におけるプログラムの実装では計算量と メモリの削減に努め,計算したものが不要になったら次 の計算を上書きしていく重ね書きの手法を使用した.最 終的に Mathematica での実装はもちろん,高速性,汎用 性に対応できる C 言語のプログラムを作成することがで きた.

参考文献

 J.Shen: EFFICIENT SPECTRAL GALERKIN METHODS III; POLAR AND CYLINDRICAL GEOMETRIES, SIAM.J, SCI, COMPUT vol.18, No.6, pp1583-1604(November 1997).